

埼玉県現代俳句協会報

第82号

2022年3月15日



座の文学たる俳句

県南Bブロック長

山本 鬼之介

新型コロナウイルスに我が国が冒されてから三年目の春を迎えた。コロナさえ無ければ、節分から立春を経過して少しづつ春の萌しを身を感じながら、やがて春爛漫の桜の時季を謳歌するのだが、まことに残念ながら、今年もそういう気分にはなれないだろう。

年が明けたら新年会を・・・の声が彼方此方から聞こえていた年の瀬であったが、令和四年の幕が上がった途端に、懸念していたオミクロン株とやらの新種のコロナが国内全土に猛威を振るい出し、そんな浮かれムードが霧散してしまった。

オミクロンの感染力の強さによって、我々俳句仲間の中でも、これまで以上に自宅に閉じ籠もる人の数が増えたことを

身をもって感じる今日この頃であるが、一方で、句会場としてよく利用されている公民館やコミセンが、一昨年のように閉鎖されていないのが不幸中の幸いと言えよう。

俳句や短歌などの文学系統の趣味については、コロナウイルスからの感染を防ぐ手段として、何かと面倒であり、また、まだるっこさは拭えないものの、通信方式やリモート方式、インターネットを利用する方法など、いろいろな方法で実施することが可能であろう。一方で、他の芸事や茶道・華道などの習い事などの現状はどうなっているのか気になるところである。この点について特に調査した訳ではないが、新型コロナウイルス感染が始まってから、受講者減によって教室を閉鎖に追い込まれるカルチャー企業が月を追う毎に増えていることから類推しても、その深刻さが伝わってくる。

そのごく身近な例として、妻が永年続けてきたコーラスグループが、一昨年の

春以来殆どまともな活動が出来ず、指導の先生を始めとして、会員一同が沈鬱な状態に陥っている。これまでは、コロナ感染が少し治まった頃合に、マスクに加えてフェイスシールドを付け、各パート半数づつの人員での練習を数回行ったが、今年になってからは全く不可能な状態と聞いている。

つまりらぬことを書き連ねてきたが、このような他部門の趣味と比較することで、俳句の有難みをつくづく実感し、再認識した次第である。

ほどほどの人数であれば、ソーシャルディスタンスを保つことが可能であり、そして、各自が嗽・手洗い手指の消毒を励行し、マスクの着用を厳守すれば、対面の句会が可能であろう。それでも心配な人は投句すればよからう。披講・名告・合評のどれもに声が伴うが、大声を出すものではないから心配は無いと思う。

筆者も一時期通信句会や通信指導を続けたが、疲れるし面白味が無い。

各自が互いに仲間の顔を見ながら行う句会こそが本来の俳句の愉しみであり、「座の文学」たる俳句の所以であることを実感させられた昨今である。

正常な姿で句会に臨める日が一日も早く来ることを切に願っている。

第十九回 埼玉県現代俳句大賞

準賞

漂着す 茂里 美絵



晩夏とはまひるの櫂のひかりなり
かもめ淡し月白を曳き還らない
ワイングラスのゆるい曲線十三夜
泪つぶつアンドロメダ星雲
バンザイをして穂芒の一本に
秋蝶といま産土へ漂着す
ルリタテハゆくえは薄き昼の間
さみしいからすこし口開け柘榴の実
逡巡の歩幅のゆるむとき照葉
少年のさ迷い銀河尖るまで
かもめにも深き秋冷パндеミック
病む人ら夕顔の実に頭を預け
バスタオルすこしよじれて白鳥座
聞き役の椅子のきしみや笑草
本来の季語とりもどす白マスク

今回、思いがけなく埼玉県現代俳句協会第十九回目の準賞を頂き誠に有難うございました。選者の先生方に心より感謝申し上げます。以上。

- ◆ 茂里 美絵（もり みえ）
- ◆ 一九三六年生まれ
- ◆ 所属結社「海程」継続誌「海原」及び「遊牧」同人
- ◆ 一九九六年 「海程新人賞」
- ◆ 二〇一〇年 「海程」賞受賞 句集に「海程新鋭集Ⅳ」「月の眩き」
- ◆ 一九九一年 現代俳句協会入会

準賞

森 岡村 行雄

朝の日に芽吹きの声を聴くような
新緑の樹々の呼吸を確かめる
遠出せず新樹光なす森に居る
遠き虹見ている森の木椅子より
黒揚羽樹々に言葉を置くように
樹に縋り空蟬風に抗えり
森に来て初秋の耳の聴くなる
樹に触れて静かに秋の声を聴く
椋鳥群れて一樹ふくらむほど騒ぐ
森に棲む猫らし赤のまま赤し
紅葉且つ散るや煙りを遠く見て
色の無い風が樹間を騒がせる
身に入むや森にメールの訃報来る
樹々すべて冬への準備おこたらす
遠近法の遠に冬木を坐らせる



この度は、第十九回埼玉県現代俳句大賞準賞を頂くことができて誠に有難うございます。

第六回の準賞以来二回目となりますが、選者の先生方に心より御礼申し上げます。試行錯誤の毎日の句作りですが、今回は、別所沼に何回か足を運び、イメージを膨らませながら自分なりにまとめたつもりです。これからもしっかりと、俳句に向き合っていきたいと思っております。

- ◆ 岡村 行雄（おかむら ゆきお）
- ◆ 一九四六年 高知県生まれ
- ◆ 一九六一年 夏炉入会指導を受ける
- ◆ 一九八六年 通信俳句会 海図創刊
- ◆ 現代俳句協会会員

準賞

退屈 金子 和美

みづうみに月を落としたのは誰
ねこに猫のぼってゐるや鏡餅
ただ広いところが好きな流れ星
捨てました執着でした爛熟し
さよならかおいでおいでか芒の穂
雷が仕留めたりユゲウノツカイ
その仕事してゐる女明易し
雲の峰キトリ線にある缺
飛びぬけて退屈な日は雪女
大屋寝かなたに地平線一本
流水や自分のなかに作る枷
鼻先を膝に押し付けあたたかし
白話草編んであなたをはめる罨
秋晴れやいつか死ぬから急ぐまい
さくらさくらみなしごになつたつもり



この度は、埼玉県現代俳句大賞準賞ありがとうございました。

俳句を始めて九年目になります。今も俳句をどう作ったらいいのかかわからず、試行錯誤の日々です。今回、自分としては尖った作品を作ったつもりでしたので、それを評価して頂き大変うれしく思っています。選者の先生方に御礼申し上げます。俳句と出会えたこと、俳句で出会えた方々、本当に私は恵まれていると感じています。ありがとうございました。

- ◆ 金子 和美（かねこ かづみ）
- ◆ 一九六三年生まれ 皆野町在住
- ◆ 所属結社「紫」
- ◆ 二〇一六年 現代俳句協会入会

準賞

誰からも

内野 義 悠

秋の虹家族の姓がみな違ふ
 草の花岳父と交はし合ふ敬語
 直角に腰折る謝罪涼新た
 秋風や触れられて知る剃り残し
 旋回の機影花野のあはくなり
 灯を創る準備秋思を愛つ準備
 流星のつづきを描ききる指よ
 眠るには心音近すぎる無月
 蛇穴に入るすり替へらるる記憶
 まづ探す四隅のピース鳥渡る
 黄落の底打ち明けてうちあけて
 木の実降る音のすみずみまで余熱
 折り合ひのつくまで霧へ浸す唇
 林檎剥くとき誰からもとほき吾
 夜へ鹿跳ねて独語のはじまりぬ



この度は第十九回埼玉県現代俳句大賞準賞をいただき、誠にありがとうございます。「心語一如」の精神を作句の核とする炎環に学び、日々励んで

はいるものの、自らの感覚を言葉という器に過不足なく満たしていく俳句は作るほどに難しく、少しでも油断するとそのバランスは容易に崩れ、針は振り切ってしまう。悩みは尽きない日々ですが、ごくたまに「これ、結構良いんじゃない? (笑)」と思える句が生まれたり、今回のような望外の結果を頂けたりと、なにより励みになります。この先も、今回の準賞に甘んじることなく、感覚も言葉もまるごと抱けるような、自然体の俳人になれるよう精進していきたい

準賞

長電話

木下 周子

喇叭水仙陽気な風と戯れし
 警察の前に代書屋花大根
 菜の花に溶けるがごとく夕陽落つ
 窓辺にフリージア抽斗に聖書
 ふるさとに桜咲く頃長電話
 弁当の蓋に飯粒ゆきやなぎ
 立葵爪先立ちで見える景色
 珈琲と花占ひのガーベラと
 新聞にのらぬ死のあり沙羅の雨
 尾道の朝顔の蒼海の青
 先行きは知らずに爆ぜる鳳仙花
 割れ柘榴若さに合はぬ厚化粧
 擦傷の残りしままの破芭蕉
 イライラとジャズを聞きたる冬菫
 カサと散る姿のままの枯紫陽花



七十の手習いとばかりに俳句をはじめ約五年句歴の浅い私に大きな賞を頂き驚いておられます。この一年落ち着かない状況で何もしないうちに過

と思います。改めまして御高選を賜りました先生方に感謝申し上げます。

- ◆内野 義悠(うちの よしひろ)
- ◆一九八八年生まれ 所沢市在住
- ◆二〇一八年 作句開始 炎環入会
- ◆二〇一九年 現代俳句協会入会
- ◆二〇二〇年 第二十五回炎環新人賞受賞
- ◆二〇二一年 炎環同人
- ◆第五回円錐新鋭作品賞第三席 (澤好摩氏推薦)

第二十回埼玉吟行俳句大会のご案内

主催 埼玉県現代俳句協会
 担当 北埼玉ブロック

左記の通り吟行俳句大会を開催します。会員、会員外を問わず多数のご参加をお待ち申し上げます。

日時 令和四年十月二十二日(土曜日)

受付時間 十時~十二時

会場 加須市民総合会館

(市民プラザかぞ) 三階

(東武伊勢崎線 徒歩三分)

住所 加須市中央二一四一十七

TEL 〇四八〇一六二一〇二九三

出句 嘯目二句 出句締切 十二時(時間厳守)

吟行地 加須まち歩きマップ参照

会費 (千方神社・不動ヶ岡不動尊・龍蔵寺)

選者 一〇〇〇円(昼食は含まず)

表彰 当協会会長等当日依頼

表 県知事賞・加須市長賞・当協会会長賞等

二十位まで

第19回埼玉県現代俳句大賞上位得点一覧

賞名	順位	得点	作品番号	題名	作者名
準賞	1位	22	15	漂着す	茂里 美絵
〃	1位	22	25	森	岡村 行雄
〃	1位	22	26	退屈	金子 和美
〃	1位	22	35	誰からも	内野 義悠
〃	1位	22	5	長電話	木下 周子
佳作	6位	21	18	テトラポッド	杉本青三郎
〃	7位	18	34	秋思	渡辺 智恵
〃	8位	16	4	或いは恋	植 朋子
〃	9位	15	17	身辺抄	田口 武
〃	10位	14	11	案山子	鈴木 良二

第19回埼玉県現代俳句大賞選考一覧

順位	一位	二位	三位	四位	五位	六位	七位	八位	九位	十位
配点	6点	5点	4点	3点	2点	1点	1点	1点	1点	1点
選者名	番号	番号	番号	番号	番号	番号	番号	番号	番号	番号
桑原 三郎	15	35	18	5	24	34	25	8	1	28
島田 妙子	11	9	13	23	4	33	25	30	27	34
石 寒太	26	28	3	9	11	10	16	32	7	34
岩淵 喜代子	5	4	34	13	14	9	35	15	1	36
山本 鬼之介	10	24	8	16	34	17	14	23	29	33
原 雅子	25	17	5	34	32	4	22	35	15	8
後藤 章	17	18	34	5	35	14	26	25	13	32
田中 朋子	15	35	26	5	13	32	34	4	1	28
関田 誓炎	25	7	16	10	5	4	1	8	35	29
網野 月を	12	11	18	35	26	15	32	29	30	25
山崎 十生	18	31	26	32	12	34	25	33	8	17
加藤 いさむ	4	25	3	36	16	35	18	15	11	5
堀之内 長一	15	26	32	35	17	36	21	18	1	14

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	作品番号	作品名
テトラポッド	身辺抄	夢模様	漂着す	雄叫び	温め酒	連携	案山子	吾亦紅	空蟬の記憶	エゴイズム	父偲ぶ	追憶	長電話	或いは恋	薔薇園	蝮の道	空		
36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	作品番号	作品名
豆いろいろ	誰からも	秋思	月の炎	砌	隆起	白南風	グリコのグー	綿の実	上がり端	退屈	森	武蔵丘陵森林公園	子に還る	潺潺と	隣人の	櫓の主	無声		

第十九回
 埼玉県現代俳句大賞応募作品

令和3年度事業報告

(自令和3年1月1日～至令和3年12月31日)

実施月日	事業内容	備考
1 1月30日(土)	監査会	○もち回り監査会に変更
2 2月14日(日)	理事会 ・さいたま文学館 ・午後1時30分より	○コロナ感染拡大により中止
3 3月14日(日)	定期総会・一句会 埼玉県現代俳句大賞発表 ・さいたま文学館1Fホール ・午後1時より ・昼12時30分より受付開始	○コロナ感染拡大により中止 ○定期総会・・・書面議決へ ○一句会中止 ○第18回埼玉県現代俳句大賞発表 (詳細は「会報80号」に掲載) ☆大賞「秩父困民党」 神谷 邦男 ☆準賞「夢の世に」 片山 蓉 ☆準賞「冬木の芽」 福島ときみ ・応募総数 44篇
4 3月15日(月)	会報第80号発行	○埼玉県現代俳句大賞他
5 3月27日(土)	現代俳句協会通常総会	○東天紅(上野店)午後3時～
6 7月11日(日)	第43回埼玉俳句大会 担当：入間・比企ブロック	事前投句のみの大会に変更 ・投句締切3月31日(水)
7 8月2日(月) ～10月18日(月)	第19回 埼玉県現代俳句大賞募集	○埼玉県現代俳句協会員に限る
8 9月1日(火)	会報第81号発行	○第43回埼玉俳句大会他
9 10月10日(日)	ブロック長会議 さいたま文学館午後1時30分～	○(事務局長後任・埼玉県現代俳句協会の年会費・諸費用の見直し)について・その他
10 10月30日(土)	現代俳句協会全国俳句大会	
11 10月31日(日)	第19回吟行俳句大会 担当：埼玉ブロック	○コロナ感染拡大を考慮して バーチャル吟行通信句会
12 随時	新会員募集	○推薦・紹介
13 随時	会報編集会議	○会報編集・校正等
14 随時	事務局作業	○会報発送事務等

令和3年度会計報告

(自令和3年1月1日～至令和3年12月31日)

(単位 円)

収入の部

項目	金額	摘要
繰越金	624,732	前年度より
年会費	288,000	1,000×288名
本部交付金	624,500	2,000×304名 1,000×15名 600×2名 300×1名
俳句大会繰入金	107,577	入間・比企ブロック
通信句会繰入金	647	県南Cブロック
一般事業費繰入金	67,177	活動費繰入金、施設借用取消等
寄付	10,000	埼玉ブロックより
雑収入	6,402	定期預金受取り利子他
合計	1,729,035	

支出の部

(単位 円)

項目	金額	摘要
一般事業費	372,354	俳句大賞・俳句大会・通信句会・ブロック活動費(R4年度活動費を含む)
会議費	52,000	諸会議交通費弁済費用
印刷・製本費	182,600	会報80号・会報81号
通信・運搬費	114,233	会報等の送料他
慶弔費	16,500	岡田家
分担金	10,000	県文化団体連合会
消耗品費	78,488	名入り封筒、インク・ラベル他
事務局費	150,000	事務局活動費
雑費	57,019	会費振替手数料
合計	1,033,194	

収入 1,729,035円－1,033,194円＝695,841円 695,841円＋500,000円(積立金)＝1,195,841円

上記金額695,841円を次年度に繰り越します。

会計 渡邊 樹音

この会計報告書について、監査した結果すべて正確であることを認めます。

令和4年1月23日

監事 田中 朋子

立会人 山崎 十生

令和4年度事業計画（案）

（自・令和4年1月1日～至・令和4年12月31日）

実施月日	事業内容	備考
1 1月23日(日)	監査会	会計監査（パルコ9F）
2 2月13日(日)	理事会 ・さいたま文学館（講座室1） ・午後1時より	○定期総会に向けての決議 その他
3 3月27日(日)	定期総会・一句会 埼玉県現代俳句大賞発表 さいたま文学館1Fホール ・9時より	定期総会 一句会（当季雑詠1句） 第19回埼玉県現代俳句大賞発表 （詳細は「会報82号」に掲載）・応募数36篇 ☆準賞「漂着す」 茂里 美絵 ☆準賞「森」 岡村 行雄 ☆準賞「退屈」 金子 和美 ☆準賞「誰からも」 内野 義悠 ☆準賞「長電話」 木下 周子
4 3月15日(火)	会報第82号発行	○埼玉県現代俳句大賞他
5 3月26日(土)	現代俳句協会通常総会	○東天紅（上野店）午後3時～
6 7月10日(日)	第44回埼玉俳句大会 担当：熊谷ブロック	○熊谷市立文化センター文化会館 当日投句（当季雑詠1句11時30分締切 受付10時） 講演 田中亚美先生・演題 金子兜太俳句の魅力
7 8月1日(月) ～10月17日(月)	第20回 埼玉県現代俳句大賞募集	○埼玉県現代俳句協会員に限る
8 9月1日(木)	会報第83号発行	○第44回埼玉俳句大会他
9 10月30日(日)	第20回吟行俳句大会 担当：北埼玉ブロック	場所：加須市民総合会館（市民プラザかぞ） 出句 囁目二句 出句締切12時
10 11月12日(土)	第59回現代俳句協会全国俳句大会	
11 11月27日(日)	ブロック長会議 さいたま文学館	○令和5年度定期総会に向けて ・事業計画の実施状況等
12 随時	新会員募集	○推薦・紹介
13 随時	会報編集会議	○会報編集・校正等
14 随時	事務局作業	○会報発送事務等 事業計画の実施状況等

令和4年度予算書（案）

収入の部（自・令和4年1月1日～至・令和4年12月31日）（単位 円）

項目	金額	摘要
繰越金	695,841	前年度より
年会費	327,000	1,000×327名
本部交付金	654,000	2,000×327名
合計	1,676,841	

支出の部（単位 円）

項目	金額	摘要
一般事業費	500,000	俳句大賞費・俳句大会・吟行会・ブロック活動費
会議費	120,000	諸会議交通費弁済費用
印刷・製本費	200,000	会報
通信・運搬費	150,000	会報等の送料
慶弔費	40,000	
分担金	10,000	県文化団体連合会
消耗品費	40,000	事務用品
事務局費	150,000	事務局活動費
雑費	70,000	会費振替手数料他
予備費	396,841	
合計	1,676,841	

積立金（単位 円）

項目	金額	摘要
積立金（収入）	500,000	前年度より
合計	500,000	

埼玉県芸術文化祭二〇二二協賛事業
第四十四回 埼玉俳句大会作品募集

本大会は、埼玉県現代俳句協会が主催する歴史ある俳句大会です。どんなにでも応募・参加できます。初心の方の参加を歓迎いたします。お誘いあわせの上ご参加ください。

大会要項

日時 二〇二二年七月十日(日) 受付開始十時(開会十三時・閉会十六時)
会場 「熊谷市立文化センター文化会館」熊谷市桜木町二丁目三三二二
TEL 048(525) 4553

JR熊谷駅下車 秩父鉄道熊谷駅下車。
(熊谷駅南口から直進、徒歩四分) ※駐車場有。

講演 田中亚美先生(「海原」同人)
演題 「金子兜太俳句の魅力」

当日投句 当季雑詠(一句)(十一時三十分締切)

投句料 千円(投句受付時)

後援 埼玉県文化団体連合会・埼玉県俳句連盟・現代俳句協会・熊谷市協賛 埼玉県・埼玉県教育委員会

主催 埼玉県現代俳句協会(会長・山崎十生・副会長・加藤いさむ・堀之内長二)

担当 第四十四回埼玉俳句大会実行委員会
(実行委員長 熊谷ブロック長・神田一美)

作品募集要項

作品 二句一組

(何組でも可、但し未発表作品に限ります。前書き、ルビは認めません)

投句料 二句一組につき千円(必ず句稿と同封してください。)

締切日 二〇二二年三月三十一日(木)

投句先 〒三六〇〇八五 熊谷市月見町一三三七二 長谷川 順子方
「第四十四回埼玉俳句大会」作品募集係

TEL 048(525) 5477

予定選者

田中亚美・後藤章・網野月を・原雅子・島田妙子・桑原三郎・石寒太
・岩淵喜代子・中村武男・関田誓炎・山崎十生・加藤いさむ・堀之内長二
・杉本青三郎・山本鬼之介・境延昭・大川原弘樹・福島ときみ・折原
野歩留・高橋邦夫・田中朋子・篠田悦子・茂里美絵・内野修・神田一美
・吉澤祥匡・渡辺智恵・長谷川順子

表彰

①事前応募句 埼玉県知事賞他三十位まで表彰
(一句高点制・同一人入賞の場合は上位のみを顕彰)

②当日投句の部 熊谷市長賞他十五位まで表彰

懇親会

大会終了後の懇親会は未定です。(開催の場合、会費四千元)

第十九回吟行俳句大会(バーチャル)の実施結果報告

埼玉ブロック 高橋 邦夫

第十九回吟行俳句大会は、芭蕉の奥の細道第一泊目の地春日部において、加藤楸郎とゆかりの深い古利根河畔を中心に実施する予定で準備を進めてきましたが、新型コロナウイルスの先行きが見通せない状況から集合での句会を中止し、古利根川をはじめとする春日部周辺のバーチャル吟行による通信句会として実施しました。

十月二十九日投句締め切り(当日消印有効)の日程で実施した結果、八十九人の皆様から二百五十句の投句を頂き、成功裏に終了しました。集合による吟行句会に比べて投句数も多かったことから入賞については上位二十人とするなどの考慮をいたしました。

入賞句は以下の通りです。

- 第一位 考えた末のかたちに葦枯れる 原 博子
- 第二位 綿の実の今朝はしけたる白さかな 増田 信雄
- 第三位 古利根の水面に崩れ今日の月 伊藤 恭子
- 第四位 屈むとは跳びたつ力ばつた跳ぶ 渋谷 和江
- 第五位 葦は穂に舐ひしままに朽ちる舟 高橋 邦夫
- 第六位 寺社巡り踏みし木の実の数知れず 小山 敏男
- 第七位 古利根に流れて落葉らしくなる 折原野歩留
- 第八位 枯蘆の間に間に波のひかりかな 鈴木 政子
- 第九位 暮早し楸郎句碑へ部活の子 萩原 陽里
- 第十位 本棚の猫の爪あと楸郎忌 持塚 悦夫
- 第十一位 ひかがみの疲れ屈めば降る木の実 松尾 和子
- 第十二位 俳人の覗き込む癖逆さ鳩 齊藤 利彦
- 第十三位 秋耕の先は筑波の二つ峰 服部三枝子
- 第十四位 鳩浮いて今は昔の船着場 澤浦 和美
- 第十五位 穴惑ひ観光マップ蛇腹折 松居 一江
- 第十六位 カスカへハ江戸ヨリ九里赤とんぼ 石原 道明
- 第十七位 小春日の川を歩いて渡る鷺 柳澤 二重
- 第十八位 落し文詠まれる時を待つてゐる 森田 紫翠
- 第十九位 脳に効く落葉ふむ音一里塚 小川 誠司
- 第二十位 落葉踏み締めては奮ひ立たんとす 松本 誠司

感銘句の鑑賞

(会報第八十一号より)

県南Aブロック 浅野 都

埋めなくていい余白までくぐり込み 杉本青三郎
無駄のないフレーズの配置に感服。くぐり込みの形態から蔓延る様子を一挙に展開させてくる巧みさ。埋めなくていいの(へい)、余白にまでの(へまで)が効いている。そこには作者の意志が込められているようだ。

アベックは死語となりけり夏帽子 高梨 武州
アベックを現代で言えば、差し当りカッブルかな?。使われなくなった言葉に一抹の淋しさを感じているのだ。いやいや、それだけではない。かつてアベックで過した時代を懐かしんでいるように思える。
夏帽子がそう言っている。

疑心鎮めてハンカチの角合わす 竹下 潤子
一瞬を捉えた表現に女性らしさと繊細さを感じた。どのような事情があり、心を鎮めたかを記さず読者に預けたのも良い。座五の、(角を合わす)が、雰囲気をかもし出している。しなやかな作品である。

県南Bブロック 岡村 行雄

暴風に押されて廃寺のめりそう 田口 鷹生
台風であろうか、とにかく強い風にさらされる廃寺を気遣う様子がうかがえます。下五「のめりそう」に惹かれました。

枇杷たわわ鳥と分け合ふ朝の膳 野平美紗子
庭にたわわの枇杷、鳥たちも狙って枝で騒いでいる情景を楽しく眺めながらの、朝の膳の様子を上手く表現されています。

すっぱんの軽さで春は柄マスク 長谷川エミ
コロナ禍でマスクを付ける日常、春は明るく柄マスクを選ぶ作者。上五「すっぱんの顔」
斑猫や勝手にひとがついて来る 中野 博夫
僕が可愛いからって餌もくれないのについでくるなよ。面倒だからあの辺で塀に登って、それから屋根の道を通ってまいてしまおう。

県南Cブロック 森川 利根子

掃苔やわが身の生死あいまに 田中美穂子
親しき友、尊敬する先達の逝去の知らせが相次ぐ中、従姉の死の知らせ、墓前に立てば自分もその中に共に入っていたい、いやもう入っているような懐かしい気持ちになっく。

裏山の風が抜けゆく籠枕 波切 虹洋

酷暑の中昼寝をすれば、エアコンの風ではなく、裏山からの風が、開け放った窓を通して、籠枕を抜けてゆく、これ以上考えられない贅沢な昼寝ではないでしょうか?

入間・比企ブロック 松尾 和子

コロナ禍を果敢に蛇は衣を脱ぐ 成田 淑美
コロナ禍の中での異色の一句がリアルに伝わって来る。さりげなくそして核心に迫る直覚俳句の妙というものが感じられる。したたかにして見事な感取というべきであろう。

夏果の夜汽車父と旅をする 鳥山由貴子
折りしも晩夏、水の輝き、蝶は風に波はみな渚に果つる季。淡々たる表現のうちに深い思いが籠められているのを感じる。
掲出句にいつしか晩年の父を思い出すのであった。諺に「孝行をしたい時分に親はなし」がある。まして俳句に「父母」のことを詠んだのがあると胸にせまるものがある。

白百合の香やクルスより散る光 古橋 淑子
作者は敬虔なクリスチャンでいられるのか異次元の空間に展開されたイエスの姿、代えがたいクルスとの出会い、この作者のいまの時は溢れるものを湛えてきらきら輝いている。同時に次の作品もある。
七月のイエスの細き腕の影

熊谷ブロック

渡辺 智恵

疑心鎮めてハンカチの角合わす 竹下 潤子
緊張感の漂うドラマチックな句。道具立ても朽い。きっちりとアイロンの利いた高級なハンカチが思い浮かぶ。フィクションであったとしても動作の主体は女性。それも自制心があり鋭い感覚の持ち主。だから残念ながら、この疑心は杞憂では済まなそう。

あの橋を渡れば風の祭りあり

長谷川順子

この句は季語の「祭」とも二十十日の傍題の「風祭」とも違う、詩語としての「風の祭り」としていただいた。季感は夏である。川を一本隔てると世界が変わることはよくあるが、そこに風の祭りがあるという詩的捉え方に惹かれた。気持ちのいい美しい景である。

椎の花こぼるる神の通ふ道

福島ときみ

この道は神社などの神域に限らず、森や山の中なのかもしれない。前句同様見えないものを感じて句にしている。この道を作者も歩いているのだろう。「通る」でなく「通ふ」としたことでこの神へのより近しさが感じられる。いずれにせよ相当な樹齢の木であろう。

秩父ブロック

新井 史子

言葉の深閑として柚子は黄に

関田 誓炎

山深く、空気の澄んだ斜面に、日をたっぷりとあびた柚子は、きれいな黄色の実をつけます。朝晩の寒さが、より柚子を際立てます。

穏やかな山里の景色が見えてきます。

椎の花こぼるる神の通ふ道

福島ときみ

秩父のミューズパークの裏側に行った時を思い出しています。
木立の中の径には、木洩れ日が揺れ静かで自分の足音だけが聞こえる。暫く歩くと径いっぱい、椎の花がこぼれている。
長閑な里山の感じが伝わってきます。

愛されるほうが退屈のうぜん花

藤澤 晴美

のうぜん花は、様々な木に吸着し、のぼり咲き、しつこい。花の色は、遠くから見てもそれとわかります。季語が妙にあっています。はつきりと言いきれる所が気持ちいいです。

北埼玉ブロック

瀬戸山 千晴

埋めなくていい余白にまでくだみ

杉本青三郎

どくだみの過剰なる生命力が余すところ無く伝わる作品。だが表記はすっきりとし、漢字は「埋」と「余白」の三文字のみである。このすっきりとした表記の作品の中でどんどんと濃い緑のどくだみの繁殖がつづき、息苦しいままでどくだみに埋まる……。そんな不思議な白昼夢を見せられた。

疑心鎮めてハンカチの角合わす

竹下 潤子

ドラマのワンシーンのようである。

誰への何の疑心であるのか興味を湧かせる。暑い昼下がりであろうか。「ハンカチの角合

わす」で、気持ちを整える事を行為として見事に具現化なされた。

百姓の笑顔のような稲の花

野本 史子

ご自身が農家でなければなかなか百姓と言いつけるのは難しい。そしてその百姓の笑顔を詠む事で、笑顔と同じようにあつた汗や涙も透かして見せたのである。
稲の花がすべてをしつかりと受け止めた。

埼玉ブロック

渡邊 樹音

夏ひばり高し眠れる古墳群

高橋 邦夫

埼玉県行田市には県が誇る埼玉(さきたま)古墳群が存在。いにしえの古代ロマンである。夏ひばりとの距離感に時空が広がり、動く夏ひばりと動かぬ静かな古墳群との対比が鮮やかな一句に仕上がっている。

手で包む螢だんだん闇を恋う

田中 朋子

愛おしく包まれた手の中の闇はきつと違うのだ。本当の闇の深さを知っている螢。その中で身を光らせていたいのだろう。甘美な哀愁が漂う。

ぼろんかすら午前と午前そして午後

林 厚夫

ぼろんかすらは「梵論葛」。時計草の別称である。午前と午前そして午後とは何だろう。花の咲き方から、いろいろと考えるのも楽しい。ひらがなの「ぼろんかすら」がリズムを奏で時間の流れと響き合うのだろう。

諸家近詠

(五十音順)

(さいたま市) 増田 信雄
野球部のダッシュ百回芝青む
いまひとつ度胸の足りぬ恋の猫

(川越市) 水庭 幸子
雛飾る祖母の磨きし床柱
寒明けてよりの寒さや脛に疵

(さいたま市) 星野 和葉
水仙活けキーンと身の腑引きしまる
引き合ひぬ松と水仙備前壺

(東松山市) 榊村 節子
春寒や小石おろおろ散歩道
梅満開人影の疎らなり

(所沢市) 宮岡 光子
春立つや初見譜面の嬰記号
恋猫の視線の鋭静電気

(さいたま市) 堀田 福朗
股のぞき海峡低くつばめ来る
島伝ひ千里はるばる燕来ぬ

(上尾市) 松居 一江
亡き人に抱く嫉妬や猩猩木
ヒヤシンス主治医も少し病んでゐる

(秩父市) 宮城留美子
忘却とはカルピスソーダの白濁
軍服の遺影静謐蟬時雨

(桶川市) 堀口 流三
櫛や知らず知らずに父の型
夕焼けて氷柱の先に陽の光る

(入間市) 松尾 和子
日ざしやや色もちそめて桜の芽
高麗川の曲る力や桑を解く

(滑川町) 宮崎 紫水
登校の声高らかに春隣
ふるさとの山ほんのりと春を待つ

(さいたま市) 堀之内長一
薄水の向こうの母へ渡れない
白鳥帰る川を流れる備忘録

(春日部市) 松本 誠司
命あるものの如くに雪降りをり
阿弥陀堂へ新雪の一本道

(さいたま市) 宮崎チアキ
置石の残雪食らひ黒光り
益子焼の壺にフリージア二・三本

(狭山市) 前田美智子
蛇穴を出っおさな児の喋り出す
をんどりの声町内に冴え返る

(桶川市) 松本 節子
露の臺小庭に十個と土の息
湯豆腐や今が幸せ百までと

(さいたま市) 宮澤 順子
春愁いカラー診断実施中
手を汚さず因果応報さえずり

(さいたま市) 曲淵 徹雄
一の宮に老いたる神馬春浅し
睡蓮の芽に軋むなり太鼓橋

(吉川市) 丸山 薫恵
梅ふむ猫に猫語の元教師
老犬の首にバンダナ背に春光

(さいたま市) 村杉 清吉
朝刊を広げしままの春の雪
遮断機の音静まりて春の夜

(川越市) 益子さとし
春昼や鬱の字むずぎ蠢きぬ
歯を削る音と匂ひと花の昼

(さいたま市) 丸山 マスミ
もう一声と外野の囁す酉の市
玄室より声洩れくるか虎落笛

(越谷市) 村本なずな
午後授業へ子どもらの列春の雪
トーストに光る蜂蜜春日和

(さいたま市) 茂木 和子
触れたれば土にも鼓動春寒し
まつすぐな犬の瞳を春帽子

(所沢市) 望月 士郎
桜降るからだの中の無人の駅
鳥雲にドールハウスの乳母車

(越谷市) 望月たけし
冬木の芽限界集落起きられず
空襲の火傷の幹にひ孫の芽

(さいたま市) 元田 亮一
「恋せよ」と卒業の日の教師言ふ
風と木のささやきを聴く春日かな

(さいたま市) 本橋 稀香
没落の貴族のごとき冬薔薇
水面揺れて夢の反芻浮寝鳥

(草加市) 森 鈴
菜の花や夢の中なる主人公
縄文の壺にたつぷり猫柳

(吉川市) 森 光
裸木の静脈さがす注射針
冴え返るゲノム解析もういいの？

(熊谷市) 茂里 美絵
風花の迷い落ちたる展翅板
春の虹すこし離れてキリンの顎

(熊谷市) 森 由美子
昭和なる女の一生煮凝れる
火の見えぬ暖房話し相手のいない家

(桶川市) 森川利根子
足音に応え一啼きこたつ猫
冬帽子どれが私の夫やら

(所沢市) 森田 鈴
春うらら歩けば歩くほど楽し
ほどほどの幸せありて里の梅

(志木市) 森山洋之助
屈み込み風船渡すちんどん屋
木の根明く心の小窓開けるごと

(狭山市) 矢島 清
下萌や言葉見つかるまでさがす
梅三分力道山の墓に水

(さいたま市) 安田久太郎
妻眠る今夜は雪になるだらう
松の木の振り落したる春の雪

(新座市) 安原南海子
この欄はいつも音読日脚伸ぶ
樵朽し根元に芽吹く小宇宙

(春日部市) 柳澤 二重
真白な富士の見おろす湖凍る
冬日満つ部屋にシヨパンのボレロかな

(越谷市) 山口 洋子
蒲公英の絮時空世界をフリーパス
湯の宿の「智恵子の酒」や山笑う

(狭山市) 山崎加津子
姿見のなかの広さよ蝶の昼
賜はりし身体髪膚青葉風

(川口市) 山崎十生
東日本大震災忌とは言へず
ない方の腎臓を揉む春隣

(白岡市) 山下 睦子
喜寿の血の暴れぬように寒九の水
知らぬ子等の絵馬にもエール梅ふむ

(加須市) 山中 未萌
風花や無言をなでてゆく無言
着ぶくれて演じ切れない浪漫派

(さいたま市) 山本鬼之介
未黒野を容れて里山完成す
春一番を迎へ撃つかに大櫛

(戸田市) 山本 弥生
補聴器の調整室や街師走
運の付く根菜食べる冬至かな

(狭山市) 横田 周子
悴むやATMが喋り出す
百歳が楽しと逝きぬ冬薔薇

(さいたま市) 横田 淳
さつきまで亡き友とるし春の夢
水玉も空気も包み春キャベツ

(狭山市) 横山かつ代
ふくろうや酒徳利に紙の栓
新聞を拡げる菱形の冬日

(熊谷市) 吉岡 正雄
運慶の仁王新芽の大銀杏
天帝と語るパラボラ緑立つ

(寄居町) 吉澤 祥匡
春立つや晩節ゆつたりと思考
早春のたゆとう水を見てあきず

(さいたま市) 吉住 光弥
補陀落の海見え岸の寒椿
舞ひ心ふつつ沸き来節替り

(川越市) 吉田 典子
待ち惚けでもない風花右ひだり
「いいえ」より「はい」が多くて花粉症

(さいたま市) 頼 奈保子
朝霧に煙る山々彩雲光る
浮寝鳥皆同じ眼で羽休み

(さいたま市) 若林波留美
戦後永し誰も拾はぬ追儼豆
暇までとどくたてがみ寒立馬

(さいたま市) 和田 美代
シクラメンおひとり様に届く赤
寒夕焼カラスを包むはぐれ雲

(熊谷市) わだようこ
気骨ある友やせ細り寒の月
ぽぽ今朝もふえてる黄色ふくじゅそう

(三郷市) 和田 義盛
隣家逝き今年届かぬ鬼やらい
立春の陽を受け妻笑む仏壇

(草加市) 渡邊 樹音
雛納め微熱は耳朶に集まりぬ
花籠に陽を入れて待つ春半ば

(深谷市) 渡辺 智恵
亡き犬の玩具出て来し遅日かな
輪郭のあらぬさみしさ春シヨール

(三郷市) 渡辺 展
寒星の一つ殖ゆコロナ無策
しんしんと音に目覚める雪の夜

(さいたま市) 綿貫ひさの
女正月中途半端な酔い心地
春待つや貨物列車はトコトコ

(さいたま市) 青木 鶴城
春立つや絵馬縦書きか横書きか
句心を知るや木立を春の馬

(狭山市) 縣 康子
戦の匂い冬の湖面にシベリウス
鬼の首立上る岩冬夕焼

(さいたま市) 秋永 悦子
軽トラと二人暮らしの梅の昼
梅固しそぞろ心を遠回り

(さいたま市) 秋谷 風舎
行きつけの粹な突きだし蒔の臺
巢ごもりの京古漬けや寒の明

(川口市) 浅野 都
引っ込みのつかなくなつた潮招
海風の申し送りの花菜風

(さいたま市) 安海 康代
老梅のふふみ初めたる秘色かな
紅椿の落ちて蹲踞水の綺羅

(さいたま市) 網野 月を
梅の里やがて干すもの醸すもの
ちいさくて小さくて大き梅の白

(秩父市) 新井 富江
あの白は空気のかたまり冬の雲
裏山のさくらのつぼみふくらみぬ

(秩父市) 新井 史子
空へ飛ぶサッカーボール風光る
戯るる鳥と瀬音の春の空

(さいたま市) 飯田 忠男
空き家の戸カタコト揺する春一番
白梅が河津に負けじと咲き急ぐ

(さいたま市) 池田 雅夫
忍城をやおら取巻く春の雪
断層の岸を枕に春の川

(志木市) 石 寒太
春風や死したる後の一句成し
等伯の少林屏風ぬかり径

(さいたま市) 飯島 士朗
眠るなら北の海底春の雪
風船がフードコート天井を



二〇二二年度
前期新会員紹介

磯部 美咲

埼玉県さいたま市西区プラザ二〇一七

深谷 健

埼玉県深谷市上野台二〇七一一
ルナフロローラ一〇五

◆句集の紹介◆

★『マネキン』 山本 鬼之介

◎出版年月日 令和四年一月二〇日
◎出版社 大村印刷株式会社

昭和四十七年十二月某日朝、真新しいマネキン人形に遭遇したことが、以後今日まで、俳句と深く係わり合う切っ掛けとなった。夢語りのな言い方になるが、俳句の神様がマネキンに身をやつし、その当時、身辺俳句からの脱却に悩んでいた自分に啓示を与えてくださったのではないかと思っている。

○自選五句

しばらくはキャベツの芯を噛みたまへ
山眠り伸ばしてみたる乳房かな
マネキンを目白へ運び冬霞
三鬼が叫ぶ紫黄よく来た忠治をやれ
くろがねの匂ふ水こそかな女の忌

第64回 埼玉文化賞 芸術部門

やまざき じゅっせい
山崎 十生



俳人。俳誌「紫」主宰。
現代俳句協会理事、県現代俳句協会会長などを務める。

埼玉文学賞俳句部門正賞（一九八九年）、県現代俳句大賞

（一九九三九年）、川口市文化賞（二〇二〇年）を受賞。
主な句集に「上映中」など。川口市在住。

埼玉県現代俳句協会顧問・参与及び役員

顧問	島田 妙子・桑原 三郎
参与	石 寒太・岩淵 喜代子・中村 武男・関田 誓炎
会長	山崎 十生
副会長	加藤 いさむ・堀之内 長一
理事 ◎ブロック長	県南Aブロック ◎杉本 青三郎・浅野 都・知念 哲庵・後藤 よしみ
	県南Bブロック ◎山本 鬼之介・森 壽賀子・茂木 和子・高橋 比呂子・鳥海 美智子
	県南Cブロック ◎境 延昭・森川 利根子・堀口 流三・石井 喜恵・保坂 翔太
	入間比企ブロック ◎大川原 弘樹・飛鳥 慧・北上 正枝・古橋 淑子
	秩父ブロック ◎福島 ときみ・新井 史子・藤澤 晴美
	熊谷ブロック ◎神田 一美・吉澤 祥匡・渡辺 智恵・長谷川 順子
	北埼玉ブロック ◎折原 野歩留・小川 紫翠・江原 正子・福島 芳子
	埼玉葛ブロック ◎高橋 邦夫・田中 朋子・越川 ミトミ・尾堤 輝義
監事	田中 朋子
幹事	事務局長 加藤 いさむ 事務局次長 大川原 弘樹 事務局係 飛鳥 慧・浅野 都
	会計係 渡邊 樹音

「埼玉風土記」シリーズ (6)

「壺春堂」(こしゅんどう)

秩父音頭発祥の地

福島 ときみ



秩父鉄道の皆野駅に到着すると「秩父音頭と俳句の町」と大きな看板、商店通りを五分位行くと左側に金子医院と壺春堂がみえてくる。

秩父の俳句紀行、野口正士著によると、『金子伊昔紅(本名、元春、明治22年〜昭和52年・88歳・医師)壺春堂として開業し(後に金子医院)長い間地域の医療に貢献。また、「豊年踊り」として秩父で唄われていたものを「秩父音頭」として埼玉県を代表とする民謡に改めた。また、伊昔紅の俳句集団は自宅にて句会を開き「七彩会」として俳句流行の祖となった』とある。

現在、壺春堂は国の登録有形文化財に指定され、秩父を訪れた著名な俳人の貴重な資料が保存され、地域の俳句の仲間の皆さんが守っている。

○ たちねの母がこらふる児の種痘 伊昔紅

○ おおかみを龍神と呼ぶ山の民 兜太

○ 風光る峠一揆も絹も越ゆ 千待(医師)

壺春堂を見学の後、金子兜太の句碑巡りを是非おすすめしたい。秩父連山の雲間より、兜太氏の豪快な声と笑顔が聞こえてくる。

俳句大会等順番表 (令和3年~12年)

参考

ブロック名	俳句大会	吟行会	定期総会・一句会
県南Aブロック	令和 9年 (2027年)	令和10年 (2028年)	令和11年 (2029年)
県南Bブロック	令和 8年 (2026年)	令和 9年 (2027年)	令和12年 (2030年)
県南Cブロック	令和 6年 (2024年)	令和 8年 (2026年)	令和 9年 (2027年)
入間・比企ブロック	令和 3年 (2021年)	令和 5年 (2023年)	令和10年 (2028年)
熊谷ブロック	令和 4年 (2022年)	令和 6年 (2024年)	令和 7年 (2025年)
秩父ブロック	令和10年 (2028年)	令和 7年 (2025年)	令和 6年 (2024年)
埼玉葛ブロック	令和 5年 (2023年)	令和 3年 (2021年)	令和 4年 (2022年)
北埼玉ブロック	令和 7年 (2025年)	令和 4年 (2022年)	令和 5年 (2023年)

会報編集委員会

- 委員長 加藤いさむ(副会長)
- 委員 高橋比呂子(県南Bブロック)
- 委員 北上 正枝(入間・比企ブロック)
- 委員 小川 紫翠(北埼玉ブロック)
- 委員 越川ミトミ(埼玉葛ブロック)

二〇二二年度会費納入のお願い

年会費 一、〇〇〇円
会計担当 渡邊 樹音
住所 〒340-0031 草加市新里町二一〇一〇
電話 〇四八一九二九一五六一

◆編集後記◆

昨年の十一月に県内で長いあいだ確認されなかった絶滅危惧種の「ミズキカシグサ」が宮代町の農業公園に隣接する水田で見つかった。およそ百年ぶりの再発見で、専門家は豊かな自然環境のバロメーターになると指摘している。ミズキカシグサは水田や湿地に生える一年草で、花期は八月から十一月。十から三十センチほどの高さで、淡紅色の花で、葉が十字対生、実は球形で紅紫色を帯びる。

開発や農薬使用で、四国と九州、山形などでわずかに自生が確認されている。明るい話題なので紹介させていただいた。コロナ禍で変異株の感染急拡大や、ガソリン価格の高騰と物価の値上げが続きますが、健康第一できり抜けるほかはなさそうです。(小川紫翠記)

【事務局 住所】

〒三四七〇二二 加須市日出安九六八一三
電話 〇四八〇七三〇五二二(加藤いさむ)

第八十二号 令和四年三月十五日 発行

発行人 山崎 十生
発行所 埼玉県現代俳句協会
〒三三三二〇一五
川口市川口五一一一三三三
電話 〇四八一三五一一七九三三

編集責任者 加藤いさむ
印刷所 有限会社 千葉印刷